

テーマ

地域における発達障害児の早期発見・支援モデルの構築

研究者

井上 雅彦(鳥取大学・大学院医学系研究科・教授)

概要

研究1 乳幼児健診の予後調査

研究2 健診後の個別療育プログラムと支援者養成

研究3 倉吉市において実施している親支援プログラム効果検証(第58回児童青年精神医学会においてポスター発表)

研究内容

研究1:平成18~20年生の倉吉市において1歳6か月健診、3歳児健診を受けた1,191名について調査。

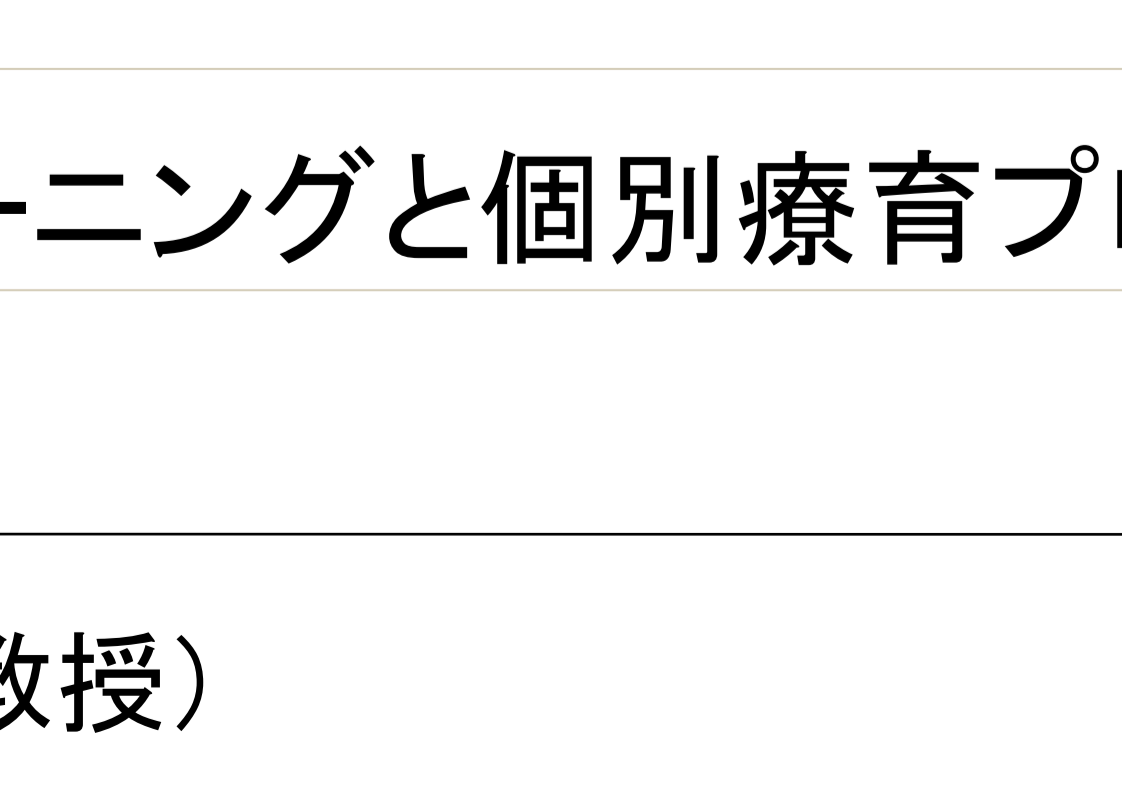
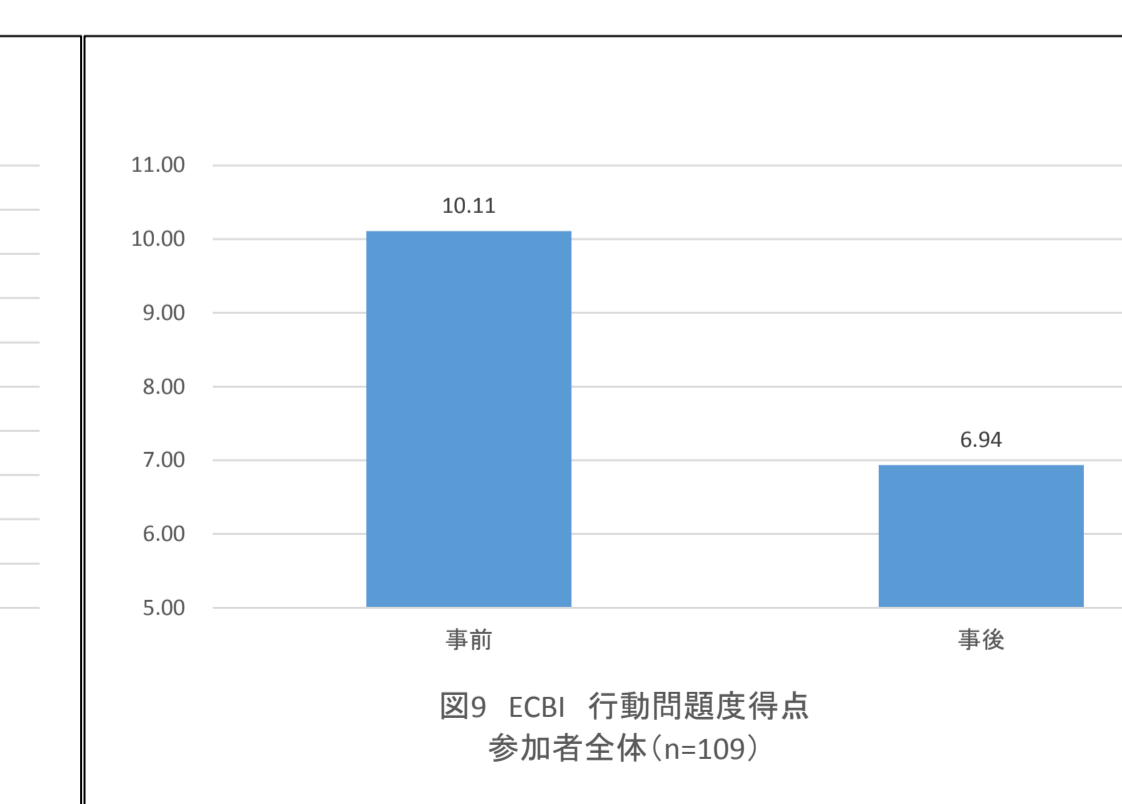
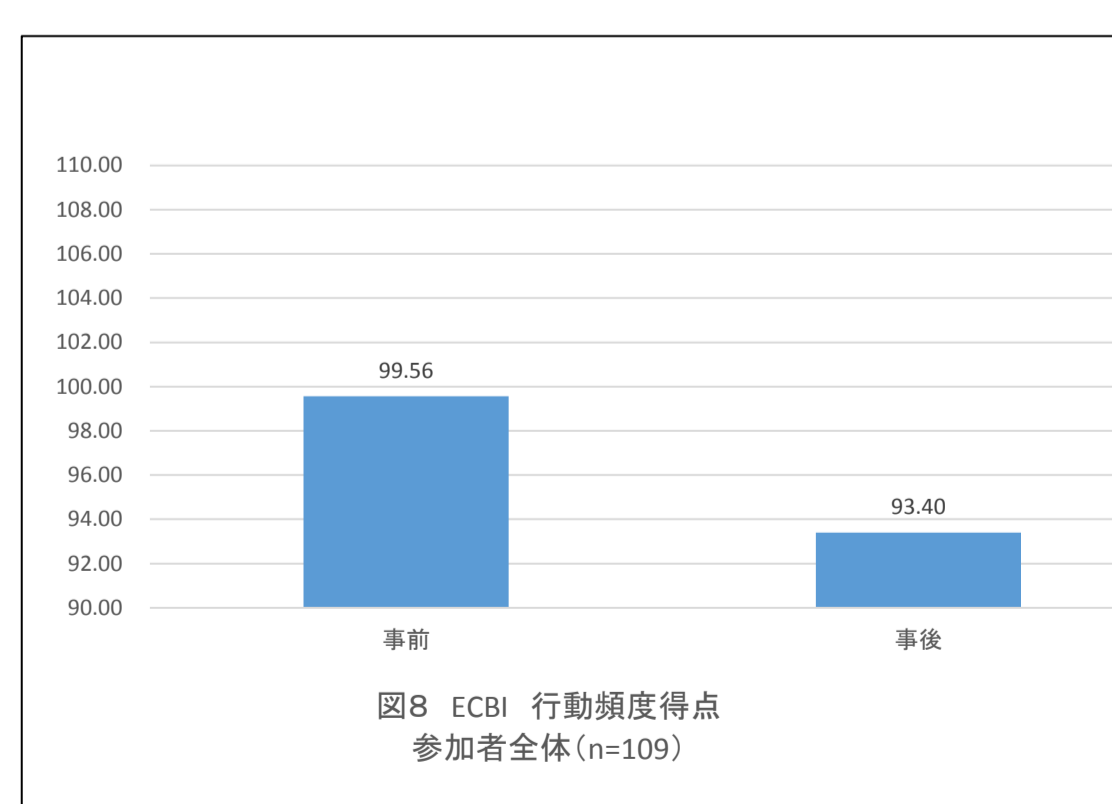
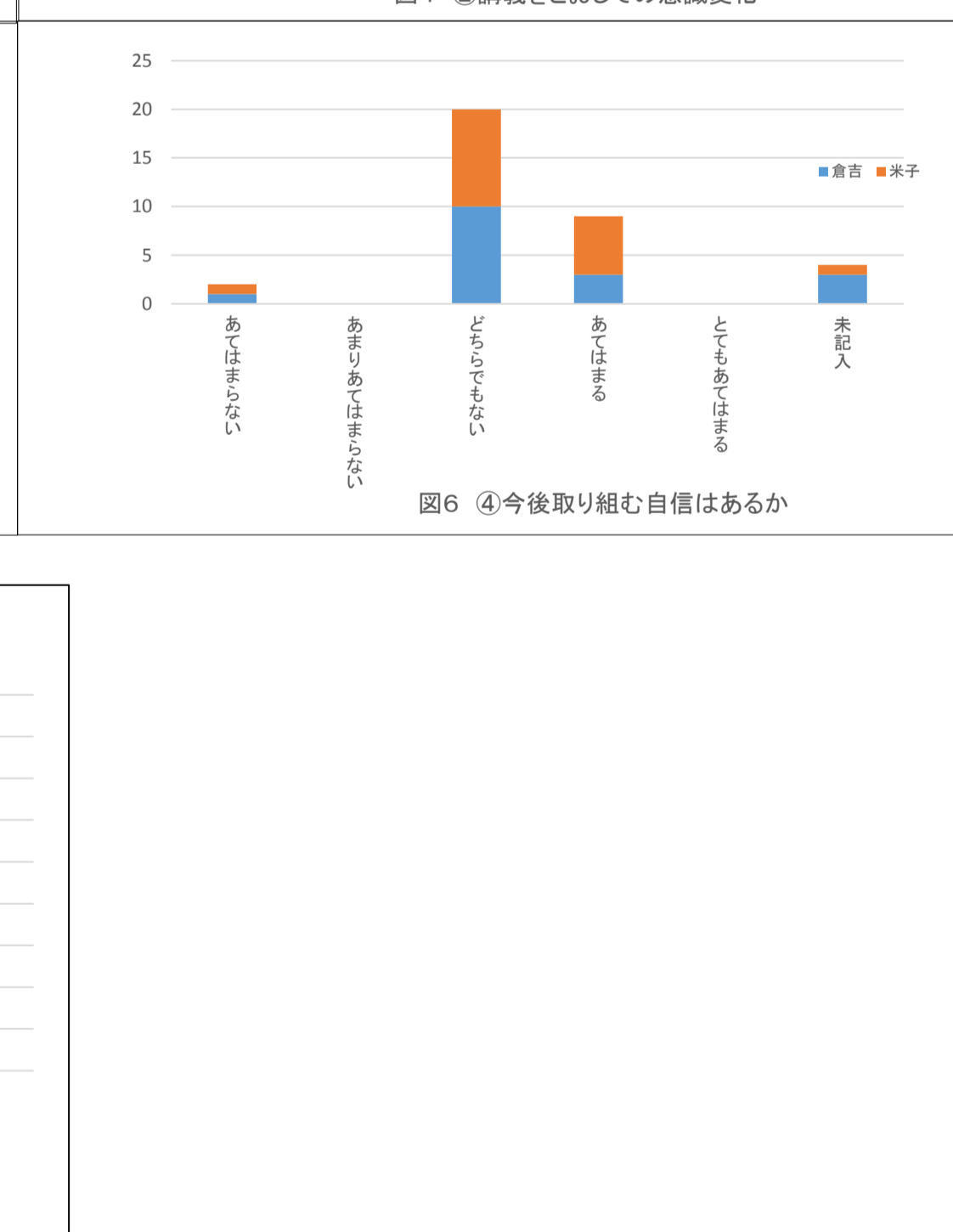
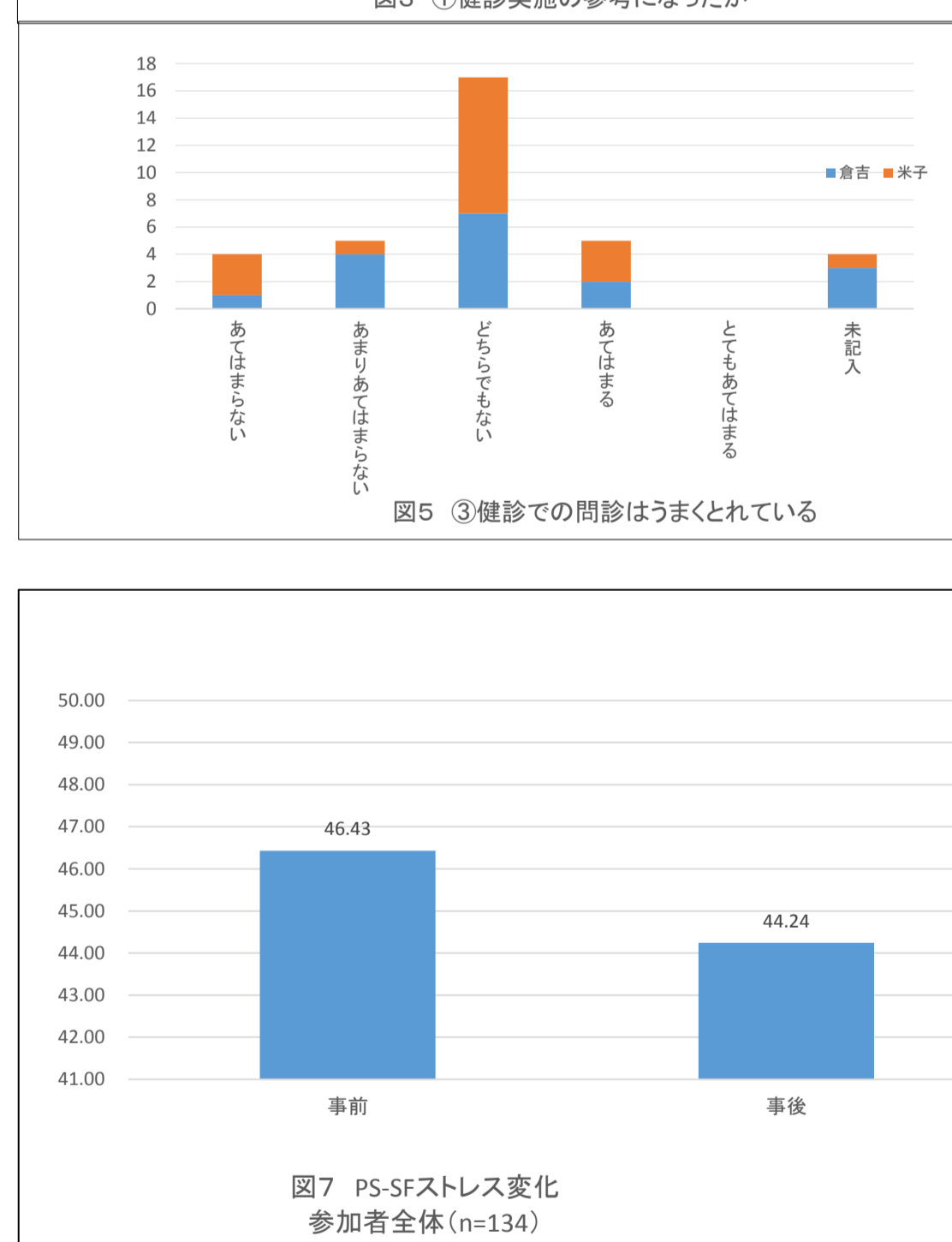
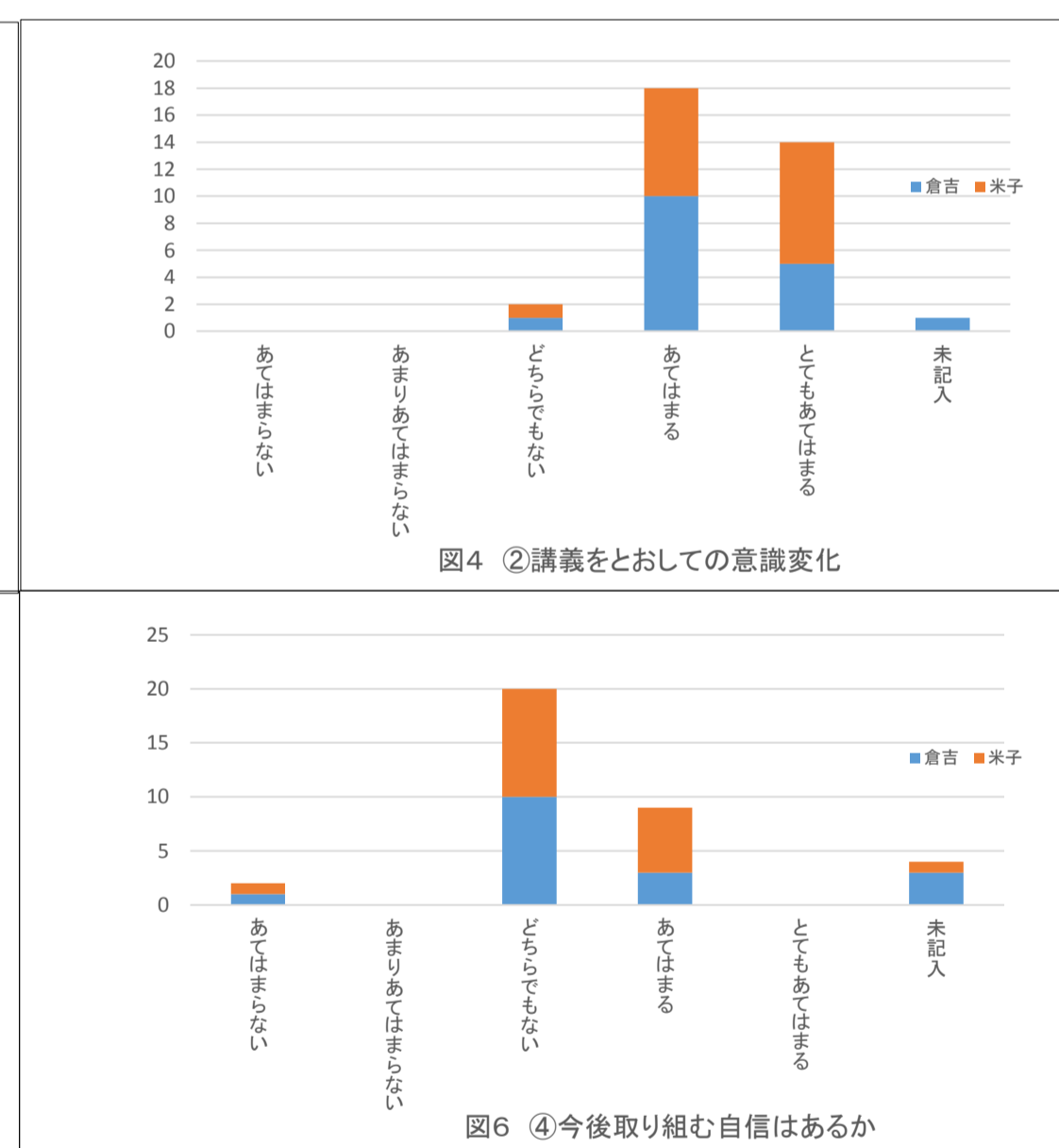
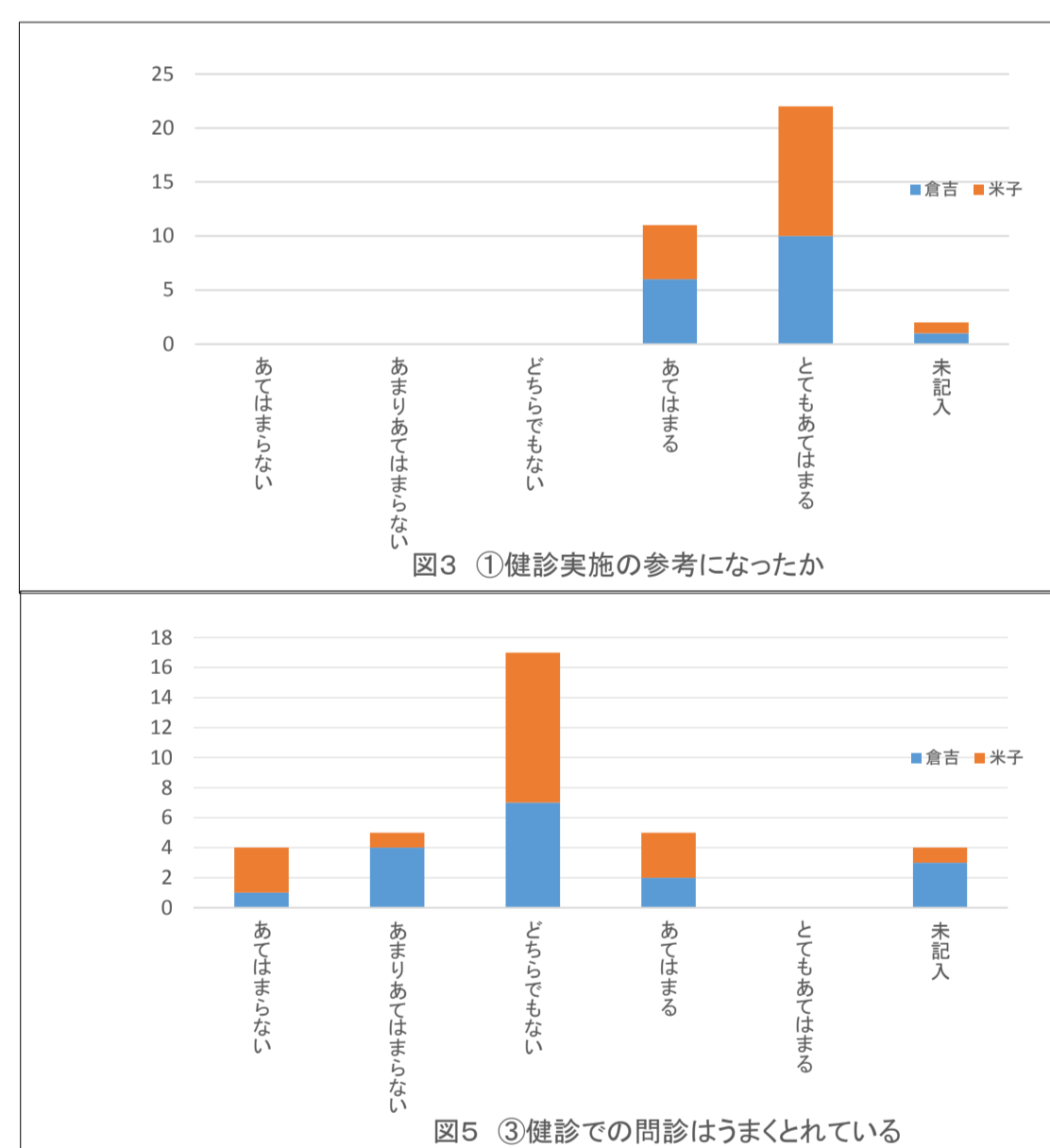
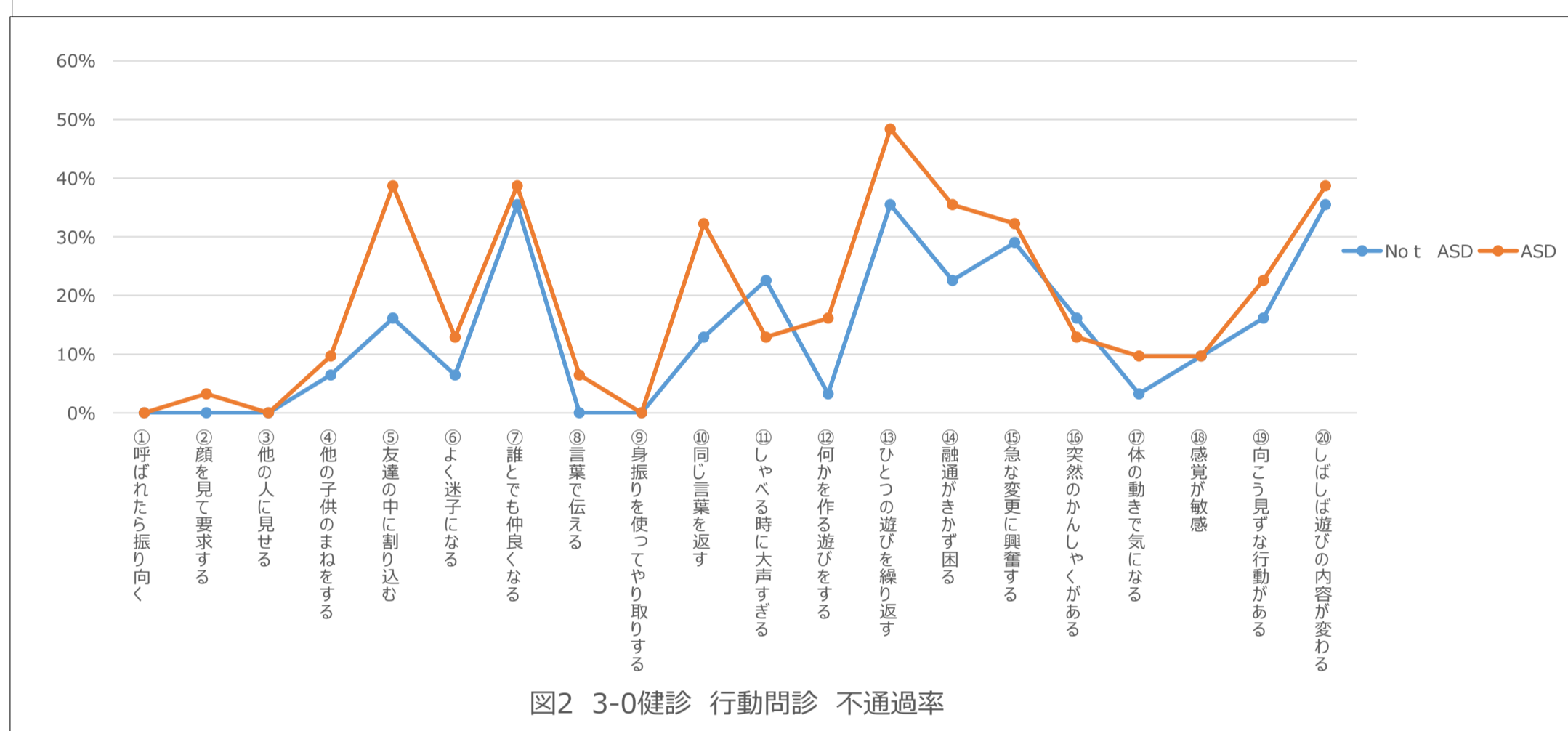
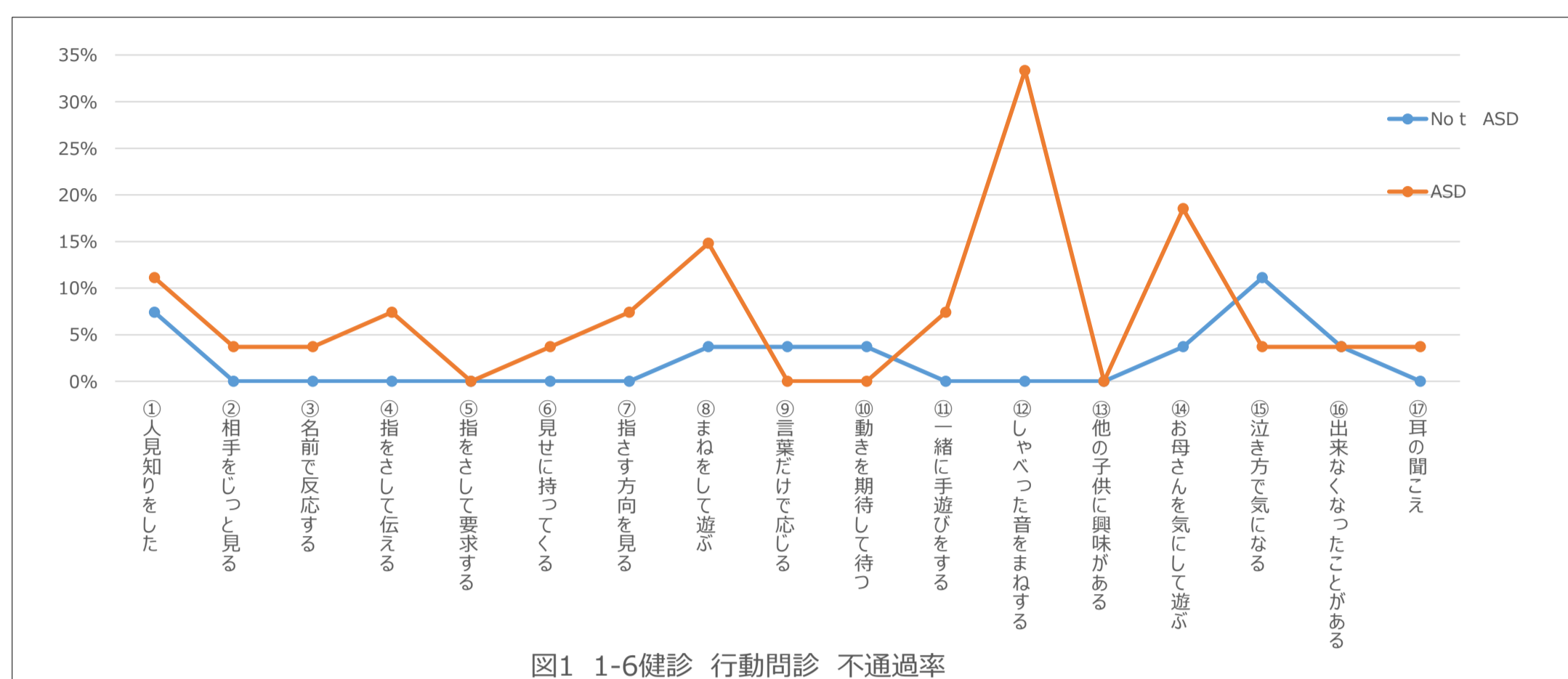
①自閉スペクトラム症(ASD)の診断率、②フォロー率、③診断時期、④ASDの気づきとなる行動面の問診票使用妥当性について検討を行った。

平成29年9月時点における自閉スペクトラム症圏域の診断を有する児童(ASD圏域群)は2.9%、3歳児健診までのフォロー率は73.5%、また確定診断時期は4歳~9歳と小学校低学年までに96%が早期の気づき・支援を受けている状況であった。一方で、行動面の問診票項目についてはASD圏域群、非ASD圏域群の非通過率に大きな差は見られず、ASDスクリーニングとして使用する妥当性についてはさらなる検討が必要と思われた。

研究2:早期支援に係る支援者養成研修を倉吉、米子にて開催。本研修会参加者51名にアンケート実施。47名より回答あり、うち健診業務担当者35名。

研修効果としては、健診実施への参考になった点と意識変化の項目においてみられた。一方で、実際の健診場面での自身のスキル評価と実用においては不安な点を残すという結果であった。

研究3:倉吉市公立保育園において、平成26~27年に保育園長により実施した子育て教室の効果を検討した。参加者157名の事前・事後のアンケートより、子育てストレスの軽減及び子どもの問題行動の減少効果が見られた。一方で、今後困難に直面した際の子育てへの自信等は低い傾向にあり、保育園という日常場面における継続的な相談支援体制の必要性が示唆された。



応用分野

今後乳幼児健診の方法を見直すともに、早期支援としてのペアレント・トレーニングと個別療育プログラムのシステムを倉吉市において実装し、その効果を検証する。

連絡先

所属 役職 氏名 井上 雅彦(鳥取大学・大学院医学系研究科・教授)
連絡先(メールアドレス、電話番号) 0859-38-6410